

日本家政学会
被服構成学部会誌

第33号

平成24年3月

部会長ごあいさつ

(一般社団法人)日本家政学会 被服構成学部会

部会長 布施谷節子(和洋女子大学)

昨年は3月11日に東日本大震災が発生し、日本中が大変な年となりました。被災された部会員の皆さまには心よりお見舞い申し上げます。被服構成学部会でも、3月24日に予定しておりました平成22年度の研究例会を中止せざるをえませんでした。計画停電と放射能汚染の不安を抱えての新年度のスタートとなりました。家政学会の年次大会直前に、被服構成学部会が中心となり被災地支援のための針箱の寄付をお願いしましたところ、短期間に全国の先生方から多くの暖かなメッセージとともに159セットの針箱が集まりました。被災地の宮城県登米市に送りましたところ、感謝の手紙を頂きました。当初は救援物資の衣類を手直しするために必要ということでしたが、一年を経た今となっては、被災した皆さまがこの針箱を使って縫い物をする中で、少しでも心が穏やかになっていただきたいと思います。復興への長い道のりの中で、被服構成学部会としてお役に立つことがあれば今後とも積極的に関わっていきたいと思います。大変な一年ではありましたが、平成23年度も部会員の皆さまのご協力のおかげで、予定の事業を遂行することができました。心よりお礼申し上げます。

平成21年度春の研究例会で、「大学と中・高校の被服製作学習の充実に向けて」というテーマの下、多くの部会員と中・高校の先生方にお集まりいただきました。その中で、製作教材の開発と普及に向けて、中・高校の先生方のご意見をいただきながら、部会として現場の先生方や生徒さんに使っていただけるような被服製作教材を掲載した本を出版したいという提案をいたしましたところ、多くのご賛同をいただきました。その後の総会でも了解をいただき、一昨年秋から企画委員を中心に準備を進め、教材案を部会員に公募したところ多くの作品案をお寄せいただきました。おかげさまでようやく出版することができます。これまでの部会員の皆さまの授業や研究の成果が、このような形で、現場のお役に立つのではないかと考えますと、大変うれしく存じます。部会員の皆さまのお手元に届きましたら、お知り合いの中学・高校の先生方にもご紹介いただけましたら幸いです。

平成23年度の夏期セミナーは、「衣心地の質の向上を目指して一着心地と見心地のトータル化を探りませんか」と題して、三重大学で開催し盛会でした。会場では多くの部会員の研究成果などをポスター発表していただき、部会員同士でじっくり拝見して意見交換をすることができました。増田智恵実行委員長をはじめ、実行委員の皆様方には大変お世話になりました。

大学では少子化やものづくり離れの中で、被服構成学は厳しい立場にあります。こんな時こそ、部会員がお互いに手を携えていくことが大切だと考えます。平成24年度は部会長や運営委員の交代の時期ですが、今後とも、部会員の皆さまのご協力をよろしくお願い申し上げます。

次期部会長ごあいさつ

(一般社団法人)日本家政学会 被服構成学部会
次期部会長 鳴海多恵子(東京学芸大学)

本被服構成学部会の活動に多くの実績を築かれた布施谷節子部会長の後任として、平成24・25年度の部会長を務めることになりました。これまでに運営委員や実行委員などの経験はありますが、部会運営を担う責任の重さに身の引き締まる思いがしております。次期副部会長の大塚美智子先生と森由紀先生をはじめ、運営委員の皆様のご協力のもと、微力ではございますが最善を尽くして参りますので、ご支援、ご協力を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

昨年は、3月11日の未曾有の大災害を経験し、被災した方々への支援、復興、今後の危機管理など、この困難な状況を乗り越えるために私たちは何を為すべきか、改めて考える機会を得ることとなりました。被服構成学の研究や教育の実践が有効に生かされ、社会に貢献できるよう、広い視野をもって活動する責務を感じているところです。

平成24年度の夏期セミナーは、「グローバルな視点から学ぶアパレル教育と企業の動向」というテーマで、教育と企業の両面から国際的視野を広げる機会となるよう企画を進めています。また、「全国中学生創造ものづくりフェア」への後援・協賛も継続し、審査の中心的役割を担うとともに奨励賞と部会賞の授与を行う予定です。

平成24年度から中学校、高等学校で順次新しい学習指導要領が実施されますが、改訂に対応した製作教材の提案として本部会が刊行した書籍「楽しいスクールソーイング」を授業に役立てていただけるよう、広報活動を進める必要もあると思います。

学校現場における被服製作教育の課題は山積していますが、部会員が所属する大学の現状も大変厳しくなっています。多忙感はさらに高まり、研究や研修時間も十分に確保できない状況の中で、運営委員をはじめ部会員の皆様が貴重な時間を割いて本部会を支えて下さっていることを真摯に受けとめ、負担を軽減する効率的な運営を基本として活動していきたいと考えます。

被服構成学における研究と教育の活性化を目指す仲間が集い、研鑽の場であるとともに、心の交流を図れる場、勇気が湧く場となる部会をめざしたいと思っておりますので、重ねて皆様方のご支援・ご協力をお願い申し上げます。

祖父江茂登子先生を偲んで

大妻女子大学名誉教授 松山容子



在りし日の祖父江茂登子先生

祖父江茂登子先生の訃報に接し 心からお悔やみを申し上げます。

先生は平成 22 年 12 月 2 日 逝去なさいました。享年 90 歳でした。伺いますと最晩年の入院中、中学生を対象とした「浴衣着付け教室」の開催に向けてお友達の方と相談などをなさっておられたそうです。このエピソードを伺って、かつてご指導をいただいていた頃の前向きで優しいお姿を目にする思いがいたしました。

思い返せば昭和 54(1979)年 10 月、私どもの被服構成学領域は家政学他領域とともに研究委員会から部会へと体制を改めました。一層の学問的基礎固めと研究・教育の充実をめざしたものです。祖父江先生はその第 1 代部会長をお引き受けくださり、昭和 58(1983)年までの4年にわたり、部会活動の基礎固めにご尽力くださいました。特に部会員多数が参加した共同研究「被服の設計・製作に関して優れた技術を持つ専門家の調査」(1980 年)、および「全国小・中学生の着衣実態調査」の 2 研究の実施と報告書出版を強力にリードされました。これは従来、例を見ない試みで、被服構成学にとり課題把握やテーマ設定に基盤を与えるものとなりました。また先生の貴重なご業績の一つと思われますのは「衣服の祖型」という概念を提示されたことです。先生は「初めて布を加工し身に着けようとする人の視点から概観した衣服の原初的な構造を祖型」とし、現代に至るまでの各種の衣服を系統的に示されました。衣服の構造を考察する際の重要な視点といえましょう。

先生は声高に何事かをおっしゃる方ではありませんでした。でも時には服装史本などには見ない「裁ち縫いのこと」などをぽつりと漏らされました。後輩に貴重なヒント、知識をお与えくださったのです。

今となりましては 先生のご冥福をお祈り申し上げるばかりです

<ご略歴>

長野県のご出身

昭和 17 年 東京女子高等師範学校家事科卒業

昭和 28 年 お茶ノ水女子大学家政学部被服学科卒業、
のち家政学部専攻生修了

昭和 17 年～昭和 20 年 福井県鯖江女子師範学校勤務、

昭和 28 年～昭和 44 年 お茶の水女子大学附属高等学校
勤務

昭和 44 年～昭和 62 年 埼玉大学教育学部教授

<ご著書>

家庭科教育学概説 (共著 建帛社)

基礎被服構成学 (共著 建帛社)

着装の科学 (共著 光生館)

子どもの心身の発達を促す手仕事のすすめ

(共編著 家政教育社)

平成 23 年度 被服構成学部会 総会

日時：平成 23 年 5 月 28 日（土）

会場：和洋女子大学 西館 2-4

平成 23 年度被服構成学部会総会は、鳴海多恵子副部会長の司会により下記のとおり進行した。

総会次第

- | | |
|-----------------------------|---------------|
| 1. 開会の辞 | 鳴海多恵子 |
| 2. 部会長挨拶 | 布施谷節子 |
| 3. 議長選出 | 薩本弥生 |
| 4. 議事 | |
| (1) 平成 22 年度事業報告 | 土肥麻佐子 |
| (2) 平成 22 年度会計報告 | 磯崎明美 |
| (3) 平成 22 年度夏期セミナー会計報告 | 小田巻淑子
磯崎明美 |
| (4) 平成 22 年度会計監査報告 | 大村知子 |
| (5) 平成 23 年度事業計画（案） | 土肥麻佐子 |
| (6) 平成 23 年度夏期セミナーについて（案） | 増田智恵 |
| (7) 平成 23 年度予算（案） | 磯崎明美 |
| (8) その他 被災地支援、ものづくり本の編集について | 布施谷節子 |
| 5. 議長解任 | |
| 6. 閉会の辞 | 岡部和代 |

上記の議事について審議し、承認された。

平成 23 年度 被服構成学部会夏期セミナー

「衣心地の質の向上を目指して-着心地と見心地のトータル化を探りませんか-」

期日：2011年8月30日（火）、31日（水）

会場：三重大学メディアホール 〒514-8507 三重県津市栗真町屋町 1577

プログラム

	8月30日（火）		8月31日（水）
12:30～	受付開始	8:30～	受付開始
13:00～13:10	開会の辞	9:00～10:00	話題提供 1 「3D 体形データの相同化とその統計 処理」 オンワード樫山 山本 幸生氏
13:10～14:40	基調講演 1 「被服分野のための 3 次元体形モデルの 開発と応用」 大阪大学大学院 黒川 隆夫氏	10:00～11:00	話題提供 2 「韓国の人体測定事業及び衣類産業での活用」 東ソウル大学校 崔 景美氏
14:40～15:00	休憩	11:00～11:10	休憩
15:00～16:30	基調講演 2 「伊勢神宮における衣・食・住 神さまの衣服はどんなの？」 NPO 法人 五十鈴塾 矢野 憲一氏	11:10～11:50	パネルディスカッション 「3D データを生かした衣服設計」 コーディネータ 三重大学 増田 智恵氏
17:00～19:00	懇親会		パネリスト オンワード樫山 山本 幸生氏 東ソウル大学校 崔 景美氏 案内 休憩 ワークショップ・パネル展示 11:50～12:00 ・3次元計測体験 浜松ホトニクス(株) 12:00～13:00 ・企業情報 13:00～15:00 東レACS(株) , (株)テクノア ・教育・研究情報 15:00～15:10 閉会の辞

基調講演「被服分野のための3次元体形モデルの開発と応用」

大阪大学大学院基礎工学研究科 黒川隆夫 氏

黒川先生が本来のご研究の傍らにすすめてこられた人体の体形モデルに関する研究について、開発されたモデルの時系列に沿って5つの項目に分けてわかりやすく解説していただいた。概要を以下に記す。

1. 体形モデルに求められる条件

体形モデルを「広く定量的な応用が可能のように、人の身体の形を記述する方法、あるいはこれによって記述されたもの」と要約し、これをみたく5条件について説明していただいた。体形記述アルゴリズムから得られる体形モデルではどのモデルでも一定の構造が生じるため、任意のモデルの体表同士が同型となる。

2. 身体曲線モデルとその応用

女性の正面と側面の像よりその身体曲線をモデル化した2次元体形モデルの構造について説明していただいた。身体曲線を体形モデルにすることにより統計解析が可能になり定量的な体形分類ができ、平均形状が算出できる。2次元体形モデルの応用例として被服構成部副部会長の岡部先生との共同研究による成長期の日本人女子の縦断的な体形変化を類型化した事例等がある。

3. 顔面形状の3次元モデル

顔面の3次元形状のモデル化手法について説明していただいた。顔面の3次元データを、ポリゴンでモデル化する場合と曲面でモデル化する場合を比較し、両者の特徴を示された。構成のための節点数、制御の容易さなどに違いがある。

4. B-スプラインモデルとその応用

双3次B-スプライン曲面を利用した体幹部の3次元モデルについて説明していただいた。体形データを疑似円筒座標に投影して750個の制御点でモデル化する。他のモデルと同様にこのモデルでも平均体形の算出や統計分析ができる。応用例として、19～63歳の日本人560名の体幹部体形を、座標別の因子負荷マップと主成分得点より視覚的に表示し類型化した事例、年齢別体形別などの平均体形を求め等身大に切り出す手法による下着設計用ダミーの開発事例、ブラジャー着用に伴う体形変化を重回帰分析しその結果から統計的に着装状態をシミュレーションする手法、体形データから身体計測値を推定する手法などが紹介された。

5. ポリゴンによる3次元モデルの開発

B-スプラインモデルからの発展形として開発中の、体形制御を柔軟に行えるポリゴンモデルについて説明していただいた。頂点の制御が容易であることから衣服モデルを作成して着用させたり、頭部や脚部を追加することも容易である。

最後にまとめとして、体形モデルをデザイン領域でデザイナーが活用できるようにするには衣服モデルの開発が急務であること、体形・ファッション（デザインを含む）・感性を連動させてモデル化できないだろうかという、今後被服構成学分野の研究者が取り組むべき課題について貴重なご示唆をいただいた。

(記録 土肥麻佐子)

「伊勢神宮における衣・食・住、神様の衣服はどんなの」

NPO 法人 五十鈴塾 矢野憲一 氏

年間 700 万人以上の人々が参拝に訪れる伊勢神宮，その神宮禰宜として 40 年奉職された矢野憲一先生より「伊勢神宮の衣食住」について衣を中心に御講演いただいた。先生は，伊勢神宮に関する著書を多数執筆され，現在は，おかげ横丁に設立された五十鈴塾塾長として古き良き日本の文化伝承に務めておられる。

今回は，天照大神はじめ神々の御装束(衣服，服飾品，神座，布団，)や神宝(神の調度品，武具，機織り，)など、日本文化の伝承に重要な役割をはたしてきた献上品にまつわる貴重なお話を伺った。

伊勢神宮は，今から 2000 年前に天照大神を祭る社として建立された。天照大神のお姿は畏れ多いということからその肖像は描かれていない。その代わり鏡が御神体として祭られている。当時の記録は何も残されていないため，神様の衣服についてもわからない。おそらく埴輪に残る衣服や神主の衣服に近いものではなかったかと思われる。平安時代以前は，年に一度神嘗祭に和妙(絹)や荒妙(麻)などの反物を神の衣服として供えた。その後，春と秋2回の神御衣祭に行われるようになった。現在の伊勢神宮(内宮・外宮・別宮など)は，正倉院に残る簡単な設計図や金具の発注書などから，1300 年前の持統天皇の時代からと推定される。この時，人々は木と草による建物を永遠に残すための工夫として，20 年毎の式年遷宮をはじめた。世界中に，このような伝承形式はなく日本独特の文化である。

一般に，式年遷宮は建物だけと思われがちだが，実は，神々の御料品(衣服や調度品)も，平安時代の「儀式帳」どおりに作り替えられてきた。2500 点にも及ぶ品々は，20 年毎に当代一流と言われる職人たちの手で守られてきた。このため，伊勢神宮周辺には松坂は機織り(江戸時代には木綿織物が発展)，伊勢の組み紐など多くの産業が発達した。これらの品々は，役目を終えると，撤下(燃やす，土中に埋める)された。両正宮の神宝は，新宮に更に 20 年保存され本様(次の製作資料)として役立てた。「本様使」の役人は，自分の目におさめ，職人に全く同じ品を完成させた後，撤下した。しかし，現在では，惜しいという意識が優先するようになり，伊勢神宮の博物館や神社に分けている。明治以前は，「神聖な品が人の手で粗末に扱われてはもったいない」という理由から撤下したのである。「もったいない」という言葉の語源はそこから来ている。その伝統文化と技術は，戦国時代の一時期，途絶えかけたこともあったが，人々の信仰心と熱い思いにより復活され今日に至る。近年は，科学技術の進歩により，本格的な草木染など伝統技術(小規模なものは現存する)の消滅や，自然環境変化により，朱鷺を始め鳥類の羽や極小の天然真珠貝など入手困難なものが増え，毎回苦労している。こうした伝統を守ることは，本当に大変なことである。長い歳月，人間国宝と言われるような人々の手により脈々と伝承され守られてきた。戦前までは国家予算で維持されてきたが，現在は伊勢神宮の力で行っている。その陰には，労をいとわない人々の誇りや職人魂があり，もの作りに対する厳しい意識が支えている。献上品は，ほんの少しの傷もミスも許されない厳しい監督のもとで製作される。こうして育まれた技術や文化の水準は，世界的に見ても非常に稀有で精巧なものである。こうした技術と精神の中に，世界的にも評価されている「もの作り日本」の原点があるのではないだろうか，と講話された。(記録 小田巻淑子)

<話題提供 1>

「3D体型データの相同化とその統計処理〜クレームのつかない服を求めて〜」

株式会社 オンワード樫山

生産技術部DPS課 山本幸生 氏

既製服を作る立場から、用いるボディの正しさについては、製造過程がブラックボックスであるため、その判断が難しい。そこで、ボディ製作上かわる経験や勘の部分と体型データを数学的に処理して平均形状を求めることとを分け、数学的な平均人をどのように導き出すかを焦点に話をすすめられた。



形を表現する、比較する、平均する、ということは日常の様々な場面で行なっている。しかし、座標値を単に統計処理すると間違いが起こり、体型分析にはならない。

それを解決するには、「微分幾何学」を使用し、原点を1箇所には置かず、比較対象に合わせてその都度移動することが、形状を正確に捉えることにつながる。座標値平均の主成分分析結果が主成分の体型変化に反映しないという問題を、植木鉢につるを例に説明がなされ、形を捉える手法として原点を移動していく方法を選ぶことの大切さがよく理解できた。

また、モデルを頂点の角度・辺の長さに変換して統計処理をすることで正しく処理が出来、形・サイズを表すことになり、洋服づくりにも便利になる。3次元では立体の性質としてガウス曲率はダーツ量、平均曲率はドレープ感、面積はサイズに対応し、使う目的に応じて使い分ける。統計処理した結果のイメージの逆合成が今後の課題とのことで、再合成の結果の行方が大変楽しみである。(記録 磯崎明美)

<話題提供 2>

「韓国の人体測定事業及び産業での活用」

東ソウル大学 崔景美 氏

Size Koreaの3次元データの責任者である崔先生より、人体測定事業やそのデータ活用状況について、ご自身の研究を中心に話題提供していただいた。

人体測定を韓国では、1979よりマルチン式で行い、法律に基づき5年毎に実施している。3次元測定は、5次(2003)より導入された。現在6次(2010)が進行中である。3次元データ採取の目的は、統計処理するためではなく人体形状の収集である。人体標準情報室が開設され、このデータを誰もが利用できるようになっている。今後の事業は、データ活用の可能性や、産業界をサポートするシステムを模索する予定である。活用状況は、構築したデータベースより断面形状を抽出しワイヤーフレームを組み、デジタルヒューマンモデルで確認した後、工業用ボディを製作して生産現場に寄与している。また衣服圧計を仕込んだ感覚ボディ、関節可動ボディ、パーツサイズを交換できるボディ、バーチャルフィッティングを行うための個人化したパラメトリックボディも開発した。他に軍服のサイズシステムを組み、ネット上に寸法入力し、仮想モデルに装着させオーダーできるシステムを展開している。更にデータを活用する場として、MTMシステムに則ったベースボールユニフォームオーダーメイドシステムのサポートを立ち上げ、BtoBビジネスを実行し売上を上げている。現在BtoCに販路を広げ開発中である。

これらの研究による試行錯誤の過程、ビジネスと研究者の視点の相違、販売員体験による消費者の商品選択行動を観察したこと、パターンを自動化するために要素整理を行いコード化したパターンライブラリーや商品選択順位のアルゴリズムを構築したことなどを詳細にお話しされ大変示唆に富んだ内容であった。(記録 渡部句子)

<パネルディスカッション>

3Dデータを生かした衣服設計

3D 人体データの利用に関して話題提供をしてくださった山本幸生氏と崔景美氏をパネリストにお迎えし、衣服の質の向上とこれから求められるもの、3次元人体情報からの衣服づくりの方向性等について、フロアも交えて意見交換を行った。

山本氏からは、体形分析をどのようにビジネスに結びつけるかについては、小さい服を着ることで満足感・安心感を得る消費者の例を交えながら、衣服の質を上げた頂点と消費者の求める頂点とはズレがあり、難しい課題であることが指摘された。崔氏からは、着心地の定量化は“様々な分野での未解決な問題を含む現代の難題である”という指摘と同時に、3D 体形データをアパレル生産に活用することで、本分野が活性化してきている現実も、併せて述べられた。

フロアからは、アパレルをはじめ産学の多方面の立場から、主に次の意見が出された。①裏付けが明瞭な商品は売れるので、今後の衣料マーケットのためには基盤となる研究が重要であり、それらを共有できる状態にすることが望まれる。②顧客の満足軸と商品の価値軸とを考えると、衣心地を数値化することが必要と考える。③3次元で服形状をとらえ、ニーズに合わせて2次元化していく研究を進めていきたい。さらに、測定時の生活習慣情報の把握やプライバシー問題への対応策について、意見交換が行われた。最後にコーディネーターの増田氏より、質の良い消費者を教育することで質の良い顧客が生まれる、という究極の課題が示された。

産学それぞれの立場から、3D データを生かした衣服設計についての最新情報と忌憚のない意見交換が実現し、参加者は各々の立場から今後の教育・研究の進め方を考える機会となった。 (記録 植竹桃子)

ワークショップ・パネル展示

衣心地の質と向上を目指す研究発表と ICT 技術

東京家政大学短期大学部 田中早苗

夏期セミナー最後のプログラムはワークショップとパネル展示でした。情報提供して下さったのは、3D人体計測装置の㈱浜松ホトニクス、3Dシミュレーションソフトの㈱テクノア、3DCADの㈱東レACS、今や部会員にはお馴染みの3企業ですが、改めて間近で拝見し、新しい活用法や開発動向を知ることのできる有益な機会となりました。

・非接触式3D人体計測装置（BLスキャナ）

まず、要旨から非接触方式にも様々な方法があることを知りました。数年前に、レーザ光走査方式による人体計測装置を初めて見たのはインターネットの動画でした。このたび実物を拝見して、読み取りとPCモニターへの書き出しの速さに改めて感激いたしました。BLSのBLはBodyLineの略でした。

・WEB上での3次元洋服の活用

i-Disigner データのインターネット上での民間利用について、と題したご説明を伺い、大学に戻らぜひネットで調べてみよう、学生にも紹介しようという思いに駆られました。テクノアさんの3D衣服画像はいつも大変綺麗です。もっとi-Disignerの操作に習熟しなくては、と思いました。最近デスクトップPCの性能が向上し、PCの値段もお安くなりましたので操作性が大変良くなりました。

・衣服設計へのアプローチ“人人人”

東レさんはアパレルの中でいつも新しいことを先に手掛けて下さいます。これまでも東レさんによって教えて頂いたICT技術は幾つもありました。クラウドコンピューティングもその1つです。大学は、残念ながら、なかなか追いついて行けません。ぜひ、バーチャルボディとバーチャル着せ付け、2D-CADと3D-CADの連携を教育機関で実現しやすいプランや工夫をお願いしたいと思いました。

・パネル展示

このたびの夏期セミナーでは、研究・教育情報の交換の場としてパネル展示が設けられました。増田先生の「教育のたて糸と研究のよこ糸をコミュニケーションで楽しく織りあげる」という魅力的な呼びかけに繰り返し寄せられるように参加された先生も多くいらしたと思います。また、普段の講義や実習を題材にしてもよいという気軽さが共感を呼び、30点の展示がありました。1分間スピーチは的確なタイムキーパーの下で予定通り31分で終了、お見事でした。ワークショップ・パネル展示を通して、私が何よりも感服しましたことは、発表と見学の誘導システムとタイムスケジュール、そしてお手伝いの方々の細やかなお気遣いでした。



夏期セミナーに参加して

文化学園大学大学院 オ ヒキョン

今回、平成23年度「日本家政学会被服構成学部会夏期セミナー」は、東ソウル大学の崔先生に紹介していただきて知りました。目次を見て崔先生の講演も含め、日本の大手会社と関係がある研究者たちが3Dを基にして衣心地の質向上を目指して講演されるということでした。

今まで3Dスキャンや3Dのプログラムによりいろいろ実験を試したことがありましたが、その製作法の基礎内容について教えてもらう機会がなかなかありませんでした。そして、黒川先生からうかがったポリゴン(三角形平面)、Bezier 曲面モデル(四辺形)、(u, v)平面などの説明が非常に面白く、また山本先生からのガウス曲率は理解し易く説明していただき、とても意味がある時間になりました。さらに崔先生の3D体型データを有効に利用して、実際に応用している韓国の例についての話も勉強になりました。

今回のセミナーで、いろいろな方向の3D体型モデル開発についての講演は勿論、伊勢神宮の講演も聞いて興味を持つようになりました。セミナー後2000年の歴史がある伊勢神宮に訪ねました。本当に神様と出会えるような神聖な雰囲気に圧倒され深く感動しました。

今回の学会では論文だけで出会ったことがあるすばらしい先生たちが沢山いらっしゃったおかげで、その先生たちと出会ったり、以前から知り合った先生と久しぶりに会えたりして、楽しい時間を過ごしました。しかし、先生ではなく若い学生たちが少なく、学生がこういう所に参加できるチャンスがもっとあったらいいなと思いました。

今回すばらしいセミナーを準備して下さった三重大大学の増田先生や委員の先生方に感謝し、紹介して下さった崔先生にも心から感謝します。

日本女子大学大学院 人間生活学研究所 全 昭玠

2011年8月30日、31日に三重大で開催された夏期セミナーに参加しました。その日はちょうど台風到来の前日でしたが、自然に恵まれた環境で、素晴らしいお話を聴くことができました。

今年度は、「衣心地の質の向上を目指して・着心地と見心地のトータル化を探りませんか」を統一テーマに、私の研究分野でもある三次元計測に関する講演もあり、興味深くお話をお聴きしました。

1日目の講演では、黒川隆夫先生が、今までなされた研究や衣服のための同型性をもった三次元体形モデルの開発に関するお話を聴かせてくださいました。また、矢野憲一氏から、伊勢神宮と神様などのお話を聴くことができ、日本の文化について知ることができました。

2日目では、企業側、教育側双方のお話を聴くことができました。オンワード樫山の山本幸生氏は、三次元計測データで相同モデルを作り、統計処理の方法について易しく解説してくださり、崔景美先生は、韓国の三次元人体計測の事業と衣類産業での活用、ボディの開発についてお話してくださいました。私の母国の先生のお話をこの場で聞くことができ、とても嬉しく思いました。

また、バーチャルボディを作成し、着せ付けや洋服の三次元形状シミュレーションできるソフト(東レACS製、テクノア製)と非接触三次元人体計測装置(浜松ホトニクス製)が展示され、体験もできました。パネル展示では、先生たちのさまざまな研究を知ることができました。

今回のセミナーを通して、三次元計測に関する研究がどのようになっているかを、研究者の実際の声で聴くことができました。今後の研究の可能性を知り、自分の研究への視野が広がった機会でした。

教員養成と家庭科教員支援に対する被服構成学部会の役割について

静岡大学名誉教授 大村知子

1. はじめに

NHKの朝のドラマ「カーネーション」は、20世紀の戦中・戦後における日本の服装が洋装化する過程とその調達方法のめまぐるしい変化や背景にあった家庭生活が描かれている。私は学生時代、JIS衣料サイズ設定のために被服構成学関係者が活躍した体格調査に少しだけ関与し、その後、半世紀近く被服構成学に関わってきた一人の研究者として、ドラマの展開を興味深く視聴している。巷では、このドラマの影響で、古いミシンのメンテナンス依頼が急増しているという。

ミシンが憧れのハイテク機器だった戦後から、やっと身近にあるようになったのもつかの間、50年後の最近では、日常の生活空間から締め出されている状況にあって、再び家庭の表舞台にミシンが登場することは、テレビドラマの影響による一過性の現象であったとしても、好ましいと思う。身近でミシンを使う姿に出会う生活が復活することは、縫製スキルの伝承においても意義があるといえよう。

その一方、情報社会では、流行も世界同時展開で、かつてのように地方では流行が周回遅れなどの地域差はほとんどなく、多様な既製服が安価にどこでも手に入る。20歳代30歳代のこれまで服づくりや縫うなどをほとんどしない時代に育った男女が、これらのドラマシーンから受け取るものは何か、時代変化をどう解釈しているのか、着ることや装うこと、服づくりに関して示唆を得ることがあろうか、彼らの関心はどこに？など、モニターになったかのように分析しながら視聴している自分に気づき、苦笑する時もある。

家庭科教育ではこのドラマの洋装の創世記に近いレベルの教育（指導？）方法をアレンジして取り組めばいいのかetc.と考えるみたりもする。ドラマの展開を自分の過去と照らし合わせて懐かしむとか楽しむというより、針と糸と布を使うモノづくりが危機にある今、被服領域の教育について考えることの方が多い。

2. 家庭科教育に期待すること出来ないこと

東京かわいいファッションなどの情報を目にする時、中学・高校で被服教育を受けたので、潜在的基礎があるからアレンジできるのか、全く別のメソッドがあって彼らが称する「クリエイト」なることができるのかといつも不思議に思う。家庭科の被服教育と無関係に育つ何かがあるのかそれが見えなくて、家庭科教員養成に関わった者としては考え込む。被服構成学部会員はどう考えるのか忌憚のないところを話し合ってみたいと思う。

最近、女子学生だけが受講生のある授業で成人体型の性差について講義をする機会があり、男性の体型特徴や服装について述べたら「製作実習のためには関係ない」と言われて相当に落ち込んだ。それら受講生の中には家庭科教員を目指す学生もいたのだが、教員養成に特化した大学の講義ではないからと論点を切り替えた。被服学専攻としての被服構成学も家庭科教員養成にかかわる被服構成学も、基本は同じであると考えているのだが、学生の求めるところはかなり異なることを実感し、家庭科教員の幅と奥行きが生じる原点を知らされた。

JIS衣料サイズが設定されてすでに40年余を経て、既製服を買って装うのが当たり前の今日、期待される教育課題も「着る物を作ることができるように…」という生産技能習得の目的から、衣生活の社会化が進み「いかに選び、どのように着てどう装うか、いかにメンテナンスをするかという、自分や家族の着装をマネジメントするための知識と技術の習得」にシフトしている。しかし、家庭科教員を養成するための被服学のシラバスが、これに対応できるように整っているとは限らない。検討課題の一つである。

進学してきた大学生の小・中・高における被服学習不足を云々する前に、家庭科教員養成における被服教育の問題点を検討し、手をこまねいていないで、もっと積極的に被服構成学からの働きかけをして、できることから課題を解消する必要がある。平成14～16年度の3年間、私が実行委員長、部長として開催した科研費による公開講座「布と糸と針を使ったモノづくり」の開催後、事後評価とその分析をしていないことには、大きな責任を感じている。講座を実施してみて、被服構成学学部会ならではの寄与ができたこと、及ばなかったこと、改善の可能性など、わかったことも多い。時間がないままに先延ばしていたそれらを検証して教員養成に応用すれば、小さな一歩であっても現状打破の一歩を踏み出せると思う。

今回の部会編集により刊行される「スクールソーイング」とマッチングしながら、被服構成学学部会が主導して前進することを期待する。

3. 小学校での一おばあちゃんとしての支援の体験

フリーの立場になってから間もなくして、小学5年生の孫が初めて裁縫道具を使う授業の参観・支援参加をする機会に恵まれた。そのときの様子のメモと感想を次に披露してみたい。

クラス担任の教師は、本時の導入の言葉もそこそこに「今日から縫い方の学習です。道具箱から針と糸と白い布を出して！糸は赤い糸を使うよ。」なんと裁縫道具の説明がないままのスタート。どの針を使うかちょっと考えていた子が、刺繍針を選んだ。糸が通しやすそうだと考えてようだ。元気そうな男児が一番長いメリケン針を、多くの児童は、なんとなくという感じで針セットからそれぞれ自由に針を選んだ。「縫うときはネ、先ずコブをつくっておかないと糸が抜けちゃうから、その練習をします。針に糸を通したら両方の端をそろえて、教科書のようにして玉結びをします。」「糸が上手に針に通らない子は、魔法のこの道具（糸通しのこと）を使えばできるからね」「では、班に別れて始め・・・」早速、お母さん達が班に入って実習開始という流れであった。お母さん不在の班があつて、リン君の三島のおばあちゃんも支援に加わった。私は、説明のなかったことを加えねばと考えて、糸の長さを決め、鋏の話や使い方を話しながら糸を切り、糸が燃つてあることを確かめさせてから、燃りを師範、ちょっとなめて湿したら、男児が「へー」と言ったが「試して合点」とのこと。なぜその針を選んだのかを聞きながら（5人の答えは「別に…」）糸通しを開始。全員が見事に1～3回でクリアー（針の構え方やめどの向きなどをデモ。老眼だが一度で糸通しが出来て内心ホッと！）。第2指の太さ・幅と糸端を出す量、指先の使い方や使う位置などの理由を語りながらゆっくり師範し、玉結び、玉止めも全員が見事に完成し、他の班では糸も通し終えていないので自分たちの早業に大得意。目を輝かせて宿題の分の10個も時間内に完成。とうとう1個もできていない子がいた班さえあつた。孫の報告によると「あの班の3人はいつも鈍いのに、おばあちゃんに教えてもらえてラッキーだったネ」「宿題もできちゃったって得意だったよ」、そして「僕のお母さんもちょうと教えられたから大丈夫！」と母親の支援も評価し、「早く、本物を縫いたいなー」とのことだった。

専科のいない家庭科の指導の一端を垣間見て、考えることが多い貴重な45分間であった。被服構成学学部会の活動として、草の根的教育指導の必要性、重要性、ニーズを実感した。

4. 小学校家庭科専門基礎としての被服構成学担当経験から

かつて、私が教員養成課程に在籍するさまざまな教科を専攻する男女の学生を対象に小学校専門基礎家庭を担当していた時、毎年、針の説明、ボタン付けのし方や返し縫のし方などの小学校の指導内容に関わる事項について、5・6年生に教える時の授業のセリフとその時使う資料や板書の図の案をつくるという課題に出していた。早めに来た児童がいた時にどう指導するか、時間が余った時のプラスαの話題なども課題には含まれるし、速度の遅い子への言葉かけも課題には含む。当然説明の根拠がなければならないので、なんとなく出来るからとい

てなんとなく話すわけにはいかないし、自分でやってみないことには、時間内で必要十分に指導できない。簡単そうで実は難しい課題のようであった。後日、5年生の担任をしていて家庭科も教えているという若い男性（理科専攻の卒業生）から、「被服の技術にも一つ一つ科学的視点と根拠があることをあの時（課題のレポート作成から）認識できました。今、子どもたちに家庭科を教えるのが楽しい。予習が大変だけど…」と駅のコンコースで声をかけられた。何時の卒業生だったか尋ねそびれたが、被服についての基礎・基本が次世代に受け継がれているらしいことがなにより頼もしく、教員自身が楽しんで指導していることも嬉しかった。

指導者は、机上の理論は理解できても手が動かない、手が動いても計画通り出来上がらないなどを体験し、自己認識し、課題解決をすることは大切だと思う。しかし少ない単位数でそれをどのように、何を実践することが、最少にして最大の効果が得られ、どう指導方法に結び付けるかという「被服構成学分野における指導法や研修方法に関する研究」も大切な課題であるのに、報文も少ない。もっと活発になされることを願う。

5. 大学においても習熟度別カリキュラムの整備と実践の必要性

免許必修の被服領域の単位が学習指導要領の改定ごとに減少し続けていることは周知のとおりである。専門をほんのちょっとかすめた程度の知識と乏しいスキルで教員の資格を得る。危機的状況であるが、学生にも大学にも落ち度はない。現状では十分な知識や技量を備えた教員を期待する方が無理といえる。そうした教員から指導を受けて進学してくるので、当然小・中・高での学びも浅く、まさに負のスパイラルである。折角家庭科が男女共修の必修になったのに進学校といわれる高校では、家庭科は2単位で、広く浅く机上学習中心が多いという。

そこで、大学としても学生が「できない」「知らない」「裁縫道具を使うのは小学校以来」を当たり前の実態として受け止め、教育課程を組むことを求めたい。被服分野での習熟度別に2段階あるいは3段階のカリキュラムを早急に用意すべき時がきている。従来の均一（多少のアラカルト程度）の内容ではなく、習熟度別に編成して教育効果と学力のアップを謀るのである。習熟度別指導はすでに小学校から高校までは実施しているし、大学でも他の専門分野ではかなり以前から実施している。教員の負担増はあるが、今やそれを乗り越えねばならないほどの危機的状況であることに、被服構成学教育・研究に携わる方々は異論がないと思う。教育効果は何年も経ってから表れることも多いので負担ばかりが増えて、ボランティアのように思えるかもしれないが、長年の経験から、必ずや努力の効果は表れて、その成果は次の世代に引き継がれ、教育業績として評価もされると思う。

習熟度別教育は、教員養成に限ったことでなく、服飾を専門としようとする学生の指導においても同様に必要であり、有効であろう。大学教育の内容とその展開も、多様性が求められている。被服構成学も、いや被服構成学こそ、それを実践しなければ大学教育として取り残されると危惧する。

6. 現職教員研修に積極的支援を

現職教員の支援は、教員を輩出し続けた側としても責任があり、大きな課題である。若い教員の未熟さへの対応ばかりでなく、新しい教育内容への転換が図れないで生徒の共感を得られないでいる教員（しかもベテランといわれる）も多い。最近ある会で、家庭科の非常勤講師をしているという方が、昭和の後半に学んだ被服製作実習を例にあげ「今もぶれることなく、男子高校生にもきちんとそのまま教えています」と、とうとうと挨拶された。私は、知的好奇心旺盛な生徒たちには面白くない授業だろうな、もっと生徒に知らせたいことや現在の衣生活に必要な事柄が山ほどあるのにと、内心忸怩たる思いで聞いた。面識もない方だったのでそのまま散会したが、非常勤講師は研修の谷間において、被服領域の教育の落とし穴かもしれないと改めて考えた。

被服構成学部会では教員研修に関して、現役研究者の研究で得られた知見と若い感性からの提案、そしてシニア会員の高度なスキルと豊富な指導経験の活用とをクロスさせて研修を進めるといいのにと考えている。

例えば、従来開催した公開講座よりも、こぢんまりとした講座を各地域で頻繁に実施すれば、内容的にはリソースであっても、その効果は大きいと思う。地方の教員にとって最先端の研究情報や被服構成学が多様な研究を展開していることを直接知る機会として得難いチャンスであり、必ずそれが生徒にも伝わるであろう。小周りがきく「小規模の出前講座のサービス」という試みを提案したい。

私自身が現役を退いた身なので、言いにくいことと言いやすいことの両面あるが、シニア会員の多くは、まだまだエネルギーが残っているので、それらの会員に呼びかけることもできる。現職を引き一社会人としてゆっくりに世の中を俯瞰する余裕ができたからこそわかったこともあると思う。被服構成学部会も会員の高齢化が進んでいることでもあり、それを逆手に利用して、現職教員の多くが最も苦手、負担であるとする被服実習の支援に、高齢者のパワーと知恵を生かさないことはもったいないといえる。

7. 衣生活の危機管理についての教育

被服領域の教育において最近よく使われるキーワードとして、環境、エコ、福祉、ユニバーサル、家族などが挙げられる。平成23年3月の東日本大震災のことはまだ生々しいが、被服教育にはぜひ危機管理（リスクマネジメント）を加えたい。

東日本大震災被災者から救援物資として裁縫道具の要望があり、部会あげて協力したように、災害時は、衣食住いずれにおいてもまずは、ローテクがものをいい、ローテクのスキルや知恵が「生きる力」になり、「生きる力の基礎」となることをあらためて体験したといえる。あらためてというのは、私は木岡悦子元部会長らと共に阪神淡路大震災被災者の衣生活に関する調査をして得た知見から、10年以上も前から衣生活の危機管理についていくつかの提案をしてきた。防災・備蓄関係では、かなり浸透してきてはいるが、家庭科教育での取り組みは、まだ緒にもついていない。2、3人の研究者の個人的働きかけではなく、知的集団として部会が提案すれば波及効果も大きいと推測する。製作実習の意義としてもサバイバルスキルの習得を前面にした教材が提案されれば、危機管理も実習もさらに受け入れられやすいと思う。

東日本大震災においてはまだまだ、被災者の生活に関連する多くの研究課題が残されている。私がもう少し若かったらと思うが、顕著な体力的加齢現象に阻まれ断念している。様々な災害時に、想定外とは言わないように、衣生活のリスクマネジメントが「できる人」そして「できている人」を育てたいと願う。

8. おわりに

被服構成学という分野に絞っての家庭科教育を考えるだけでも、次から次に課題があげられ、解決や対応が急がれることがらばかりである。私はこれまで「やるしかない！」と試み、「できない理由をあげるより、一つでも、2分の1でもできることを探す、その一部だけからでも実践していこう。やるしかない！」をモットーに歩んできた。思いばかりが大きく、歩みは遅々たるものであったが……。

人が衣服を着ているかぎり被服構成学が必要であると自信をもって、被服領域の学びを支え、家庭科教育におけるこの領域の充実に被服構成学部会会員が寄与していくことを心から願い、大いに期待する。

競争的社会にあって大学教員も、業績を厳しく求められ、その業績評価は、教育・研究・社会的貢献などが主要な基準となろう。これらのことから、被服構成学の教育・研究者として、有用な人材の育成は教育業績、現職教員の再教育・研修・支援活動は、社会的貢献の業績として、高い評価にもつながると考える。

学位論文「JOURNAL DES DAMES ET DES MODES における服飾の定量的分析」

と服飾教育への展開を旨として

名古屋女子大学短期大学部 大澤香奈子

服飾研究と学位論文

数年来続けてきた Journal des Dames et des Modes パリ版 1797-1839 (以下 Journal des Dames et des Modes) の服飾研究を博士論文にまとめることができた。これは、甲南女子大学が所蔵する Journal des Dames et des Modes を資料として、服飾の形態、色、表現の諸側面について定量的な分析から考察を行ったものである。

Journal des Dames et des Modes は、18 世紀末から 19 世紀中葉までの女性服飾が劇的な形態上の変化を呈した時期に刊行されたもので、そこにはその時々モードが記録されている。これに添えられたファッション・プレートはすべて Costume Parisien (期間後半は Costumes Parisiens となる) とのタイトルで、服飾のスタイルの推移を克明に表している。多くの服飾史研究書には、近代の女性服飾の推移がスタイルの形態的特徴の変化で説明されている。しかし、スタイルの推移が数値的なデータで検討されたことは少なく、服飾の定量的な分析は手薄であった。甲南女子大学図書館が所蔵する Journal des Dames et des Modes がほぼ完全なカタチが揃っており、時系列データを得ることが可能であることから、これを対象とすることで、その資料の大部分を占めるテキストとファッション・プレート Costume Parisien の両面からデータを取得することができた。服飾には知性や教養を示す流行のカタチが表れ、形態、色、表現の諸側面はその服飾を成す要素と考え、これらについて取得したデータから定量的な分析を行い、服飾を考察することを目的として取り組んだ。本研究に取り組むにあたり、長きにわたりご協力賜った甲南女子大学図書館には深謝の思いが尽きない。また、ファッション・プレートのデザイン解析については科学研究費補助金を受けて取り組むことができた(若手研究(B)20700231「19 世紀ファッション・プレートのデザイン解析における服飾研究的アプローチ」)。

本研究ではまず分析資料選定を目的に資料についての基礎調査を行った。この調査によって、時間的変化を連続的に、または一定間隔をおいて取得できる情報を持つ資料である MODES と夜会服に相当するコーディネートの Costume Parisien が資料に相当と判断した。MODES は Journal des Dames et des Modes に常時掲載された唯一のトピックであった。これらの資料、即ちテキストとファッション・プレートの両面から、服飾の形態、色、表現といった諸側面についての分析を行っていった。

形態については、これらの資料から新しいスタイルへの推移の過程を数値化して示すため、スタイル推移の中で見られる形態的变化として広く知られる、ウエストラインの下降、袖のボリュームの膨大化を Costume Parisien に描かれた図像のプロポーシオンから検討した。ここではエンパイア・スタイルから新しいスタイル、つまりロマンチック・スタイルへの形態变化の推移の過程を数値的に示すことができ、その段階的变化を捉える事ができた。また、この形態的变化の時期とほぼ同じに、Costume Parisien のキャプションにも変化が表れていたことが分かった。キャプションには当初装いの目的や衣装の用途が記されていたが、徐々に個々のアイテムのより詳細で具体的な説明が記されるようになっていった。

色については、科学的な色の分析によるものではないが、資料にある色情報から服飾における色の特徴の一端を明らかにしたいと考え、限定的な Costume Parisien の衣装の色測(分光測色計 MINOLTA CM-2600 d を用いた)

と、MODES のテキストにある色情報からスタイル推移における色の特徴を検討した。得られた結果の中で興味深かった点は、アイテム別に色の傾向が異なっていたこと、そして、年別にあるいは短期的な流行色があったということである。特に短期的流行色は色相も時々異なり、色調も薄いものから濃いものまで様々であった。当時既に染色の面では多彩なカラーバリエーションを市場に送り出すことが可能であったこと、濃く鮮やかな織物に価値がおかれた状況になかったことを推察すると、この短期的流行色は新しさをアピールできる要素と理解した。モードにおいて新しさは一つの価値であり、色はその価値を表し他との差異化を図る手段の一つであったと考えるが、このような服飾における色の役割は現代に通じるものではないだろうか。

表現について、資料の膨大なテキストの中に有用な情報があることは容易に想像できる。しかしこのテキストはこれまで服飾の側面を裏付ける資料として用いられることはあっても、これをデータとして分析することはほとんどなかった。そこでMODES のテキストをText Analytics for Surveys (IBM SPSS) を使用してテキストデータ分析を行い、数量化Ⅲ類によってモードの服飾表現の特徴をどこまで捉えることができるかを検討した。ここでは課題も残したが、総合的な装いのデザイン・コンセプトとこれを具現化する服飾表現のキーワードをうかがうことができた。今後もさらなる分析、検討を行い、服飾が持つ形あるものと感性的な形ないものとの緊密なつながりの検証を行っていきたいと考えている。

服飾教育への展開を旨として

Journal des Dames et des Modes をはじめとするモード新聞やそれらに添えられたファッション・プレートが過去の服飾を知る貴重で有用な資料であることは間違いない。しかし、そのような資料は所蔵する機関に限られているばかりでなく、保存・保管の問題もあり広く公開されているとは限らないのが現状であろう。これまでに行った調査・分析は Journal des Dames et des Modes の一部であり、得られた諸結果は資料が発信した、限定された服飾についてのものであるが、分析は今後さらに対象範囲を広げ、内容も詳細化させていく予定である。これと併せて、例えばデザインやファッションを学ぶ学生たちが、こうした資料を活用できるように、既存のシステムを利用した資料の教育活用の試みを始めている。まず進めているのがファッション・プレート Costume Parisien のデータベース化の試みである。これによって Costume Parisien が絵画的に与えるイメージ情報に止まらず、衣装の素材や装飾等についての詳細確認や、ファッションマーケット、コーディネートにかかわるキーワード検索等ができるようにしたいと考えている。服飾研究から得た諸結果や新たな知見、研究成果をデザイン・服飾教育への活用へとつないでいきたい。

学位論文「布の風合いにおける「しっとり感」の評価に関する研究」

付：シルエットとの関係の確立『総合的な着心地』の新提案を目指して

武庫川女子大学 末弘由佳理

人間が物に触れた時に感じる触感覚の一つに「しっとり」という感覚がある。一般的に我々は「しっとり」という言葉の認識はあるものの、特に布に対する評価においては、曖昧な言葉として認識される場合が多い。しかしながら、高付加価値な布の風合いを創り出す上で興味ある感覚であると考えられる。

布の「しっとり」の感覚は、基本風合いの「ぬめり」の要素を含む感覚であると考えられる。「ぬめり」は毛織物、特にカシミア繊維によって強く引き起こされる感覚であり、また、基本風合いの中で最も曖昧な感覚であることや、合成繊維の評価では、毛織物中心の感覚である「ぬめり」はワキシーな感覚として悪い風合いを表現するときに用いている。これらから「しっとり」と「ぬめり」は異なる感覚と考えることができる。そして、現在では、「ぬめり」という風合いを正確に理解できる熟練者も少なくなっている。

本研究では、布から受ける「しっとり」を布の風合い評価におけるひとつの指標と位置付け、(1) 布に対するこの感覚の意味する内容、(2) 布の評価値に用いることができるかどうか(3) 「しっとり」を触知覚する際の視覚による影響の3点を中心に官能検査と機器計測による物性値を基にその関係について研究を進めた。

まず第一に、布に触った時に感じる「しっとり」が婦人用薄手服地のどのような性質と関係があるかを明らかにすることを目的に実験を行った。ここでは、手触りに関して「なめらかさ」を感じるものを試料として選定し、主観的評価と布の物性値の関係を検討した。布の触感評価において、「しっとり」をより強く感じる布は、同時に「あたたかさ」、「やわらかさ」においても感覚が強いことが分かった。物性値の中で、布の「しっとり」の感覚と関係のあるものは、最大熱流束 q_{max} 、平均摩擦係数 MIU、圧縮仕事量 WC と厚さの値であり、これらのパラメーターは官能検査により得られた「あたたかさ」、「やわらかさ」の感覚に関係する物性値である。また、順位法による布の触感評価において「しっとり」をより強く感じた布の構造は、糸が細く、糸密度が高く、通気抵抗の値が大きい布であり、更には、布表面に毛羽を有しており、毛羽をこすることで摩擦抵抗感が強くなり、その結果、「しっとり」の触知覚を強くしていた。以上より、布に対する「しっとり」の触感を考える上で必要となる物性値が明らかになった。

第二に、布に対して抱く「しっとり」の視覚・触覚の統合評価において、視覚情報である色が及ぼす影響を明らかにすることを目的とした。官能評価による主観的な評価と分光測色計による測色データとの関係を検討した結果、カラーカードを用いた視感評価において「しっとり」を強く感じる色は、彩度の値が低く、くすみが多い色であり、カラーカードの色から受ける「しっとり」の感覚は、「重い」、「暗い」、「くすんだ」イメージである。布を見て、触って評価した「しっとり」の知覚においては、色の差は評価に影響を与えており、視覚・触覚の統合評価で判断している。また、色が布の「しっとり」の評価に及ぼす影響は、表面の毛羽の動き、摩擦係数の変動などによって異なることが明らかになった。

第三に、上述の通り、布表面の毛羽の動き易さが「しっとり」に影響を与えることが明らかになったため、フェイクファーを試料として、毛の長さや毛の動き、毛の長さや接触冷温感、毛の長さやしっとりとの関係について検討した。また、フェイクファーの表面摩擦抵抗を測定するため、パイルの表面に沿って、円柱のセンサーを水平方向に滑らせた際に発生する力を測定する方法を提案した。フェイクファーを触って評価した場合、「しっとり

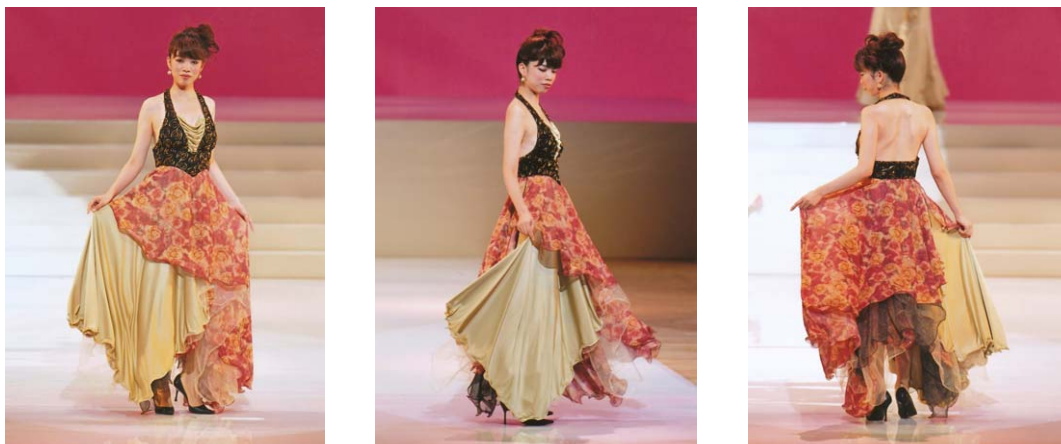
り」の感覚と「毛の動き易さ」, 「心地よさ」は高い相関関係にあることが分かった. また, パイルが長くなると, 指でこすった時のパイルの密度変化による割合が高くなり, 「毛の動き易さ」を小さく感じ, したがって, 「しっとり」も小さくなった. 以上のことから, 表面に毛羽のある布は, 動き易い毛を有する場合に, 「しっとり」の感覚が強くなり, また, 布に対する「しっとり」の感覚は心地のよい感覚であることが分かった.

以上の結果をまとめると, 「ぬめり」は風合いの感覚として, なめらかで, ざらつきが少なく, 圧縮, せん断, 曲げともにやわらかくて, 弾力に富むと表現され, 関係する力学特性は, 表面特性, 圧縮特性, せん断特性である. それに対して, 「しっとり」は, なめらかで, 摩擦抵抗が大きく, 接触冷温感があたたかく, 圧縮やわらかく, せん断かたい風合いであり, 「ぬめり」と類似した感覚はあるものの, 異なる感覚であると言える. また, ここで明らかにした「しっとり」は毛織物以外の布に生じた感覚であり, このことが「ぬめり」との大きな差である.

本研究で得られた知見を総合すると, 布の風合い評価として, 「しっとり」を提案することができると考える. ここでは, 「しっとり」に関する物性値を抽出したが, 今後はそれらの物性値を基に, 「しっとり」の尺度を作り, 「しっとり」の高低を数値化することを目指すことが必要である. また, 平面の布を3次元の衣服の形であるシルエットと「しっとり」の関係を明らかにすることができれば, 総合的な衣服の着心地評価の新しい形を提案できるのではないかと考える.

現在は, 特性上, 総体的に接触冷温感があたたかく, 圧縮やわらかい性質を有するニットに着目し, ニットのしっとり感について研究を進めている. パターンナーとしての実績のある元アパレル企業勤務の S 氏によると, 布のしっとり感とは「寄りがあまい」「ずりっとした感覚」「ドレープ性が高い」等のイメージを持つという.

下図は, 2011年9月23日(金・祝)開催(於: NHK大阪ホール)の第79回NDKファッションショー(社団法人日本デザイン文化協会大阪支部主催)に出品したイブニングドレスである. この作品には, 素材としてニットを多く用い, 写真に示す左スカートに使用している花柄プリント, 胸元と右スカートに使用しているゴールドの布はいずれもニットである. ニット特有のドレープ性を生かすため, スカートのパターンはサーキュラーとし, 胸元はたて方向に数か所タックをとり, 横方向にはバストに対してネックダーツを入れる要領で切り開き, ドレープを出した. 視覚的なしっとり感があると仮定するならば, 筆者はこのドレスに表現したシルエットをイメージの一例として仮想している. 視覚的な「しっとり」, また, S氏が表現する布の「しっとり」についての科学的裏付けはまだ存在しないが, 手触りによる官能評価とKESシステムにより明らかになった「しっとり」と衣服のシルエットやデザインとの関係について検討することが今後の課題である.



第79回NDKファッションショー出品作品 舞台写真

「第12回全国中学生創造ものづくり教育フェア」報告

和洋女子大学 布施谷節子

第12回は、平成24年1月21日・22日に、昨年と同様に東京都江東区の新木場タワーで開催された。被服製作部門は「豊かな生活を創るアイデアバッグ」コンクールで、昨年と同じ課題である。コンクールは全国ブロック大会で優秀な成績を修め、選り抜かれた15名が、新木場タワーに集まり、21日の午前・午後の合計3時間半の中で、予選の作品と同じものを、事前のレポートに従って製作するというものであった。

製作の条件は、使用する布の合計面積が110cm×50～100cmで、布は複数種類使用してもよい。古着を使用してもよいが、古着のポケットやファスナー、ボタンなどの部分をそのまま使ってはいけない。裏地なしで、立体構成とする。バッグの口は塞がるようにする。デザインの工夫はバッグ本体とする。入れるものの目的に合わせて、耐強の縫い目及び縫い代の始末をする。ポケットは必ず本体につける。ポケット口は三つ折にして手でまつ。スナップは必ずつける。型紙は事前に作成しておく。出来上がったら実際に入れるものを使いながら1分程度のプレゼンテーションを行う、などであった。

3時間半の競技中、私を含む4人の審査員は、出場者の間を回り、型紙の配置や縫製技術をはじめ安全への配慮、作業効率、課題箇所の遂行などの様子を細かにチェックした。競技中は、ミシンの音だけが響くような静寂の中で、出場者も審査員も大変な緊張感に包まれた3時間半であった。今年は全員が時間内に出来上がった。作品の完成後、生徒はショートスピーチを含むプレゼンテーションを行った。1分間の短い時間ながら、使う人への思いやものづくりへの思いを一生懸命表現していた。

競技中の様々なチェック項目とレポートの内容ならびにプレゼンテーションの内容などを含む全部で21のチェック項目の総合得点で順位を決定し各賞を割り

振った。受賞した生徒の作品は技術水準が高いのはもちろんのこと、使う人への思いがこもった創意工夫がされていた。多くのバッグは数種類の使い方ができるというものだった。手際よさとミシン操作の卓越した技には驚かされた。コンクールに備えて十分な練習を積んだ成果であろうが、中学生がここまでできるかと感心するばかりであった。ただし、2,3の生徒は、まつり縫いやスナップ付けの基礎的な技法において問題が見られた。重要なチェックポイントであったが、本人も指導の教師も間違った認識であったかもしれない。授業の中で正しい技法を見につけさせてもらいたいものである。

被服構成学部会賞は千葉市立大椎中学の成田実桜さんに決定した。偶然にも昨年と同じ中学校の生徒で、先輩の受賞が励みになって出場したのではないかと思ひ、偶然の一致ながらうれしくなった。幼い妹さんがドライブ中の渋滞で飽きないようにおもちゃを座席に座りながら取り出して遊べるように考えたというバッグであった。賞状と洋裁道具などをセットにした賞品を贈呈した。新木場タワーに展示された生徒作品の中で、部会から2名に奨励賞として賞状を贈呈した。授業内での作品として「エッフェル塔のバッグ」、課外での作品として「アレンジ自在ワンピース&ショートパンツ」の2作品であった。今年度から中学校で新指導要領に基づく授業が開始されるが、今後、家庭科における布を使ったものづくりはどのような方向をたどるのか一抹の不安を感じている。

今回は、実行委員会から体験セミナーに部会から人を派遣して指導に当たって欲しいと依頼され、急なことでもあり、本学の学生3名にボランティアとして参加してもらい、会場に来た生徒や保護者や教師に手縫いのポケットティッシュカバー作りのお手伝いをした。ここでも生徒は手縫いに四苦八苦していた。



アイデアバッグコンテスト被服構成学部会賞

(千葉市立大椎中学 2年 成田実桜)

幼い妹が車の中で飽きないように座席に座りながらおもちゃを取り出して遊べるバッグ



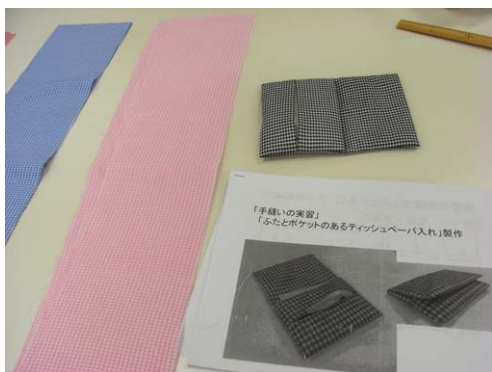
生徒作品コンクール (家庭Ⅰ部門)

生徒作品コンクール (家庭Ⅱ部門)

被服構成学部会奨励賞

(高崎市立永長野郷中学 星綾香)

(茨城県城里町立常北中学 片岡美稀)



体験セミナー (ポケットティッシュカバーの製作)



被服構成学部会として支援

<2011年 ITAA 年次大会>

東京家政大学・相模女子大学(非) 小田菴淑子

2011年 ITAA 年次大会は、11月3日から11月6日まで、ペンシルバニア州フィラデルフィアのシェラトンホテルで開催された。Celebrating Inclusivity & Innovation のテーマのもと、参加者は400余名であった。当地は古都であるとともに、西海岸屈指のアパレル産業が盛んな地域である。そのため、プレコンファレンスツアーには、魅力的な企業見学が数社用意されており、その中の一社 DAVID'S BRIDAL 社見学に参加した。近年、急成長を遂げたこの会社は、販路と生産拠点を海外に大きく展開する典型的なグローバル企業である。日本や中国、東南アジアでの売り上げは大きく伸び、現地生産も行うが、パターンなどの技術面は流出しないよう本社で一括管理している。また、パターンとデザイン両方に精通したベテランには、パタンナーとデザイナーを統括する権限が与えられ、コストダウンを図っている。これは、ヨーロッパにおけるモデリストを中心とした生産システムを取り入れていると思われる。中国などの海外生産拠点では、精密な刺繍を安価で製作するなど、企業戦略が徹底している。社内はブライダル会社らしく清潔感に溢れているが、社屋は鉄骨の建物をパネルで仕切っただけの簡素なものだった。しかし、各人のスペースは個性的にレイアウトされ、壁には家族やペットの写真も飾り、日本では考えられない自由な雰囲気には驚いた。このように、生産性を重視し、そのほかのことは自由な雰囲気、建物に不必要にコストをかけない米国式のやり方に学ぶべき点は多い。鉄骨とパネルの建物は、簡単に移転、縮小、拡大に応じられるだろう。このような米国流の生産現場のスタイルは、これまで訪れた多くの企業やショップに共通していることを再認識した。用意された昼食をはさみながら、各部門チームによる熱心な話と質疑応答が続き、予定よりも一時間以上延長された。時間に厳しい米国では異例のことであるが、会社側の熱意と参加者の関心が合

致してのことである。最後に、自社で開発した肥満体のリアルなボディを公開してくれた。ボディの種類が少ない日本とは異なり、米国ではボディが充実しているが、それでも不十分ということらしい。衣服と体型に対する認識は、日本のアパレルとは感覚が異なり、さすがに既製服発祥の国であると感じた。休憩時、それまで流暢な英語で話していた院生が、いきなり日本語で「日本の方ですか？珍しいですね」と声を掛けてきた。Mr. Keith Nishida は、両親がハワイに永住、米国で育ち工学系大学を卒業後、ファッションビジネスを専攻し、デザインしたロゴマークは、ハワイ大会に採用された。将来は日本で活躍したいと抱負を語ってくれた。ぜひ頑張ってもらいたいと思う。

事務局長交代後、初の今大会は、これまでのアットホームな雰囲気から省力化が図られ、戸惑うこともあった。しかし、海外との共同研究推進や、院生と教授の討論会などが設定され、新たな動きが感じられた。また学会の Special Topics sessions 研究事例報告で印象に残ったのは、「The Shirts Dress : A Case of Study in Creative Process」で、ノースカロライナ大学・グリーンボロ校の Melanie Carrico 教授を中心とした3つの大学の共同研究である。数名の大学院生や助教による、自然をテーマに、デザインの発想から衣服に具象化するまでのプロセスに興味深かった。その時点では質問できなかったが、最後の朝食会で、偶然、隣のテーブルに着座された先生に思い切ってお話すると喜んでくださり、発表の詳細を閲覧できるアドレスを教えてくださいました。また Dressed Film Screening の夕べでは、翌日、Keynote Speaker として講演した紳士服デザイナー Siki Im 氏が、移民からデザイナーになり、その後、挫折し、ニューヨークでホームレスとなり、そこから再起するまでのドキュメンタリー映画が上映された。再起が約束されているわけでもない時点で制作した映画と聞き、米国ビジネス社会の厳しい一面を垣間見る思いがした。次回の年次大会は、2012年11月14日～17日にハワイ、ホノルルで開催される。

<日本人間工学会>

金城学院大学 吉村真由美

人間工学会の第52回大会は、平成23年6月6日(月)、7日(火)に早稲田大学国際会議場で開催された。同時に日韓シンポジウムも開催された。

メインテーマは「みんなの人間工学、最先端の人間工学」であった。特別講演のひとつが早稲田大学名誉教授の野呂影勇先生による「人間工学による物作り—5つの鍵、2つの事例—」であった。世の中に送り出す商品を作るという視点で野呂先生の御経験を踏まえた考えが示され、なかでも印象に残ったのが、物作りに必要な5つの鍵である。「鍵1. 経済案件の処理」「鍵2. 中小企業に目を向けよう」「鍵3. 国際商品を目指せ」「鍵4. 造形が決め手」「鍵5. 理論と方法の構築」を挙げられた。これまでの「みんなのための商品」は、「より多くのユーザー」に合わせた物作りを目指してきており、カバー率が100%に近いほど良い商品であると評価されてきた。これに対し、これからは「ユーザーを特定した商品」作りにも、もっと目を向けていく必要があるのではないかと説いておられた。大量生産—大量消費の時代から、多品種少量生産の時代になって久しい。本来、人は一人ひとり違っているという大前提に立ち返り、よりよい製品作りとは何かを改めて考え直すことも必要であること、そして、そのために人間工学がどのような貢献できるのかについて深く考えさせられた。この視点は今後の被服の物作りを考えていく上でも大切なことであると再認識させられた。

前回の51回大会から始まった「ハイブリッド発表」は今回の大会でも継続された。良いと思われる新しいアイデアを積極的に取り入れ取捨選択していく気風の人間工学会らしい。多種多様な分野の研究が一堂に会する点だけでなく、産学協同の取り組みや一般向けの情報発信にも積極的で、いつも新しい刺激を受けることができる点が人間工学会の大きな魅力だ。次回の研究大会は、6月9日(土)、10日(日)に九州大学で開催される。

<日本衣服学会>

埼玉大学 川端博子

衣服学会の第63回(平成23年度)年次大会は、平成23年11月12日金城学院大学で開催された。発表は18演題で、被服教育、染織学、福祉と衣料、着意意識、被服の快適性、材料、色彩に関する内容であった。毎年のことながら、被服学の多様性と奥深さを実感する。

特別講演では、山野美容芸術短期大学名誉教授の渡辺總子先生が「誰でもが楽しくファッションブルに生きるために—高齢者・障がい者のファッションの課題—」の内容でお話いただいた。先生が長年関わってこられた研究・教育・社会活動の経験をもとに、平成23年5月に中高年の既製服・セミオーダーの会社を立ち上げられた。いくつかの製品をお持ち下さり、それぞれの服に込められた思い・工夫も伺うことができた。

調査・実験などを通して得られた衣生活の課題点や知見が提言されているが、現実の服作りに活かされていないことにもどかしさを感じるのは私だけではあるまい。先生の素晴らしさは、研究の成果を現実の衣服に対応させて実践されておられることに尽きる。被服構成学を核とし先生に続く人材が育っていくことは、よりよい衣生活を実現するために必要だと改めて感じた。

その他の学会活動として、9月2日午前文化学園服飾博物館「暑さと衣服～民族衣装にみる涼しさの工夫～」とランチを挟んでボタンの博物館を見学した。年次大会翌日の11月13日には、京都文化博物館「京の小袖」見学した。学会開催という名目のため特別な解説をいただくことができる、服飾史と服飾文化を専門とする会員から話を伺うことができる。更に、参加費は無料という特典もあったりするので、大変お得な気分である。

広報活動ではHPのリニューアルを図っており、公開の折には、一度、ご覧いただくとよい。次回の年次大会は、11月10日京都華頂大学を予定しているので、参加していただけたら学会の雰囲気伝わってくると思う。

研究動向（修士論文・科学研究費補助金）

「平成 23 年度修士論文テーマ」

「妊娠期・授乳期における女性用下着に関する消費科学的研究」平井千尋（指導：鳴海多恵子）東京学芸大学

「平成 23 年度 科学研究費補助金 研究課題」

基盤研究（A）

「無線通信による熱中症予防支援システムの構築と被服環境デザインの最適化」，平成 23 年から 26 年，横浜国立大学・薩本弥生（研究代表者）

「エコ&ユビキタス対応 3 次元ファッションシステムの開発」，平成 22 年から 23 年，三重大学・増田智恵（研究代表者）

基盤研究（B）

「我が国の小・中学校『ものづくり教育』再構築に関する研究」，平成 20 年から 23 年，広島大学・鈴木明子（研究分担者），比治山大学・若元澄男（研究代表者）

「オンデマンドファッションを利用したユニバーサルファッションの実現」，平成 23 年から 25 年，京都女子大学短期大学部・渡邊敬子（研究代表者），実践女子大学・高部啓子（研究分担者），滋賀県立大学・森下あおい（研究分担者）

基盤研究（C）

「衣服の動作適応筋電図評価—ユニバーサルデザインの視点から—」平成 22 年から 24 年，昭和女子大学・石垣理子（研究代表者），昭和女子大学・猪又美栄子（研究分担者）

「ベトナム北部農村集落に於ける伝統衣服の研究」，平成 21 年から 23 年，昭和女子大学・猪又美栄子（研究分担者），昭和女子大学・谷井淑子（研究代表者）

「子どもの足の健康を目指した「靴教育」の実践—靴によって起こるトラブルを防ぐ—」，平成 21 年から 23 年，金城学院大学・片瀬眞由美（研究代表者）

「衣生活の改善による授乳期の女性への支援」，平成 23 年から 25 年，埼玉大学・川端博子（研究代表者）

「生活実践への自己効力感の向上を促す家庭科ものづくり教育の再構築に関する研究」，平成 22 年から 24 年，広島大学・鈴木明子（研究代表者）

「肢体不自由児・者のズボンの着脱動作解析と自立を助ける修正衣服の開発」，平成 23 年から 25 年，熊本大学・雙田珠己（研究代表者）

「ユニバーサルデザインに向けた衣服設計用ボディの開発」、平成 23 年から 25 年、実践女子大学・高部啓子（研究代表者）

「東北の刺し子の文様特性に関する研究」、平成 23 年から 25 年、福島大学・千葉桂子（研究代表者）

「量産衣料用デジタル仮縫い工房」開発のための人体の 3 次元形状推定システムの検討」、平成 23 年から 25 年、大妻女子大学短期大学部・土肥麻佐子（研究代表者）、三重大学・増田智恵（研究分担者）

「体形と筋負担を考慮したパーソナルファッションのための基礎的研究」、平成 23 年から 25 年、広島大学・村上かおり（研究代表者）

「スタイル画の感性価値を活かした衣服デザインの創造的設計支援システムの開発」、平成 23 年から 25 年、滋賀県立大学・森下あおい（研究代表者）

若手研究（B）

「多面体を用いた衣服の縫合後の立体形状予測システムの作成」、平成 21 年から 24 年、福岡女子大学・伊藤海織（研究代表者）

「布の「しっとり」感に関する素材物性の客観評価」、平成 22 年から 24 年、武庫川女子大学短期大学部・末弘由佳理（研究代表者）

（（注）部会員の皆様への呼びかけに対して、お申し出頂いた分をのみを掲載しました。）

会 務 報 告

1. 平成 23 年度会務報告

1) 事業報告

- ① 総 会
日時：平成 23 年 5 月 28 日（土）
場所：和洋女子大学 西館 2-4
- ② 夏期セミナー
「衣心地の質の向上を目指して-着心地と見心地の
トータル化を探りませんか-」
日時：平成 23 年 8 月 30 日（火）・31 日（水）
場所：三重大学メディアホール
- ③ 全国中学生創造ものづくり教育フェアへの後援
日時：平成 24 年 1 月 21 日（土）22 日（日）
場所：新木場タワー
- ④ 研究例会
「大学と中・高校の被服製作学習の発展に向けて」
Part II - 新学習要領の実施にむけて -
日時：平成 24 年 3 月 24 日（土）
場所：和洋女子大学
- ⑤ 部会誌 33 号発行 平成 24 年 3 月 31 日（土）
- ⑥ ホームページの維持管理
- ⑦ 「楽しくスクールソーイング」刊行他
- ⑧ 臨時総会
日時：平成 24 年 3 月 24 日（土）
場所：和洋女子大学 西館 2-4

訂正のお願い

昨年度の被服構成部会誌 32 号 18 ページの事業報告
⑤に記載いたしました研究例会は、東日本大震災のため中止致しました。ご訂正下さいますようお願い致します。

2) 庶務報告

- ① 第 1 回運営委員会
日時：平成 23 年 5 月 28 日（土）
場所：和洋女子大学 西館 2-6
 - (1) 平成 22 年度事業報告
 - (2) 平成 22 年度収支決算報告
 - (3) 平成 22 年度夏期セミナー収支決算報告
 - (4) 貸借対照表について
 - (5) 平成 22 年度会計監査報告
 - (6) 平成 23 年事業計画
 - (7) 平成 23 年度夏期セミナーについて
 - (8) 平成 23 年度予算案について
 - (9) 夏期セミナー予算案について
- ② 第 2 回運営委員会
日時：平成 23 年 8 月 30 日（火）
場所：三重大学 総研Ⅱ 2F 会議室
 - (1) 平成 23 年度研究例会について
 - (2) 平成 24 年度夏期セミナーについて
 - (3) 次期部会長、監事の推薦について
 - (4) 各係よりの報告と問題提起
 - (5) その他
- ③ 第 3 回運営委員会
日時：平成 24 年 3 月 24 日（土）
場所：和洋女子大学 西館 2-6
 - (1) 研究例会について
 - (2) 臨時総会について
 - (3) 部会監修「楽しくスクールソーイング」の刊行について
 - (4) 平成 24 年度夏期セミナーについて

- (5) 現運営委員からの活動報告と新運営委員へ引継ぎ事項の確認
- (6) その他

3) 会計報告 (次頁以降参照)

2. 平成 24 年度事業計画 (案)

① 総会

日時：平成 24 年 5 月 12 日 (土)

場所：大阪市立大学

② 公開夏期セミナー

日時：平成 24 年 8 月 31 日 (金)

9 月 1 日 (土)

場所：オンワード総合研究所研修センター

③ 全国中学生創造ものづくり教育フェアへの後援

日時：平成 25 年 1 月 19 日 (土)、20 日 (日)

場所：新木場センター

④ 研究例会 平成 25 年 3 月

⑤ 部会誌 34 号の発行

⑥ ホームページの維持管理

⑦ その他

◆夏期セミナー

収入の部

費目	予算	決算	備考
参加費	450,000	613,000	会員 9,000円×54名 非会員 11,500円×10名 学生 3,000円×2名 学生 1,000円(1日)×6名
寄付金		10,000	
部会会計より補助費	100,000	100,000	
合計	550,000	723,000	

支出の部

費目	予算	決算	備考
1会場費	85,000	83,975	
2講師謝金	73,000	72,221	徴収税 7,221円を含む
3シンポジスト講師謝礼	56,000	55,555	徴収税 5,555円を含む
4要旨集代	100,000	84,210	
5印刷代	34,000	1,408	
6雑費	20,000	7,424	
7会議費	50,000	190,481	
8通信・輸送費	20,000	17,400	
9交通費	30,000	6,200	
10庶務費	20,000	31,885	
11見学手土産代	6,000	3,150	
12人件費	50,000	50,000	
予備費	6,000	0	
合計	550,000	603,909	

差引残高 $723,000 - 603,909 = 119,091$

◆懇親会

収入の部

費目	予算	決算	備考
懇親会費	180,000	175,500	会員、非会員 4,500円×39名
合計	180,000	175,500	

支出の部

費目	予算	決算	備考
13懇親会費	180,000	171,000	
合計	180,000	171,000	

差引残高 $175,500 - 171,000 = 4,500$

◆染色体験

収入の部

費目	予算	決算	備考
染色体験費	78,000	78,000	
合計	78,000	78,000	

支出の部

費目	予算	決算	備考
14染色体験費	78,000	78,000	
合計	78,000	78,000	

差引残高 $78,000 - 78,000 = 0$

会計 小田巻 淑子 渡部 旬子 滝澤 愛

平成22年度 収支決算報告（平成22年4月1日～平成23年3月31日）

(円)

科目	予算	決算	増減	備考
I 事業活動収支の部				
1. 事業活動収入				
基本財産運用益	0	0		
特定資産運用益	0	633	▲ 633	
入会金収入	0	0	0	
会費収入	325,000	299,500	25,500	年会費
会誌購読料等収入			0	
大会等収入	594,000	798,500	▲ 204,500	夏期セミナー
広告料収入	0	0	0	
学会刊行物売上収入	0	0	0	
著者負担金収入	0	0	0	
補助金収入	0	0	0	
一般寄付金収入	0	0	0	
特別寄付金収入	0	0	0	
雑収入	0	305	▲ 305	
他会計からの繰入金収入	0	0	0	
事業活動収入計	919,000	1,098,938	▲ 179,938	
2. 事業活動支出				
① 事業費支出				
大会・研究発表会等開催経費	0	0	0	
講演会・シンポジウム等開催経費	814,000	584,428	229,572	夏期セミナー(会議費除く)
学会誌等刊行費	110,000	76,150	33,850	部会誌印刷、送料
研究発表要旨集代	0	0	0	
研究補助費	0	0	0	
表彰費	10,000	22,311	▲ 12,311	モノづくりフェア部会賞
関連学会協力費	10,000	10,000	0	モノづくり協賛金
広報費	35,000	34,410	590	HP契約、維持管理
給料手当	0	0	0	
臨時雇賃金	0	0	0	
旅費交通費	30,000	11,540	18,460	作品集会議
通信運搬費	40,000	0	40,000	
消耗品費	10,000	33,600	▲ 23,600	作品集参考書籍
印刷費	0	0	0	
雑費	10,000	0	10,000	
② 管理費支出				
給料手当	0	0	0	
臨時雇賃金	0	0	0	
退職給付	0	0	0	
福利厚生費	0	0	0	
総会費	0	0	0	資料印刷費は、印刷費に計上
会議費	20,000	204,797	▲ 184,797	作品集、夏期セミナー
旅費交通費	0	0	0	
通信運搬費	0	7,550	▲ 7,550	引き継ぎ関係
備品費	0	0	0	
消耗品費	0	5,879	▲ 5,879	印鑑、封筒、領収証
修繕費	0	0	0	
印刷費	0	940	▲ 940	振込用紙印字、会議資料
光熱水料費	0	0	0	
事務委託費	0	0	0	
事務所管理費	0	0	0	
諸謝金	0	0	0	
租税公課	0	0	0	
支払負担金	0	3,430	▲ 3,430	
雑費	0	1,731	▲ 1,731	
減価償却費	0	0	0	
他会計への繰入金支出	0	0	0	
事業活動支出計	1,089,000	996,766	92,234	
事業活動収支差額	-170,000	102,172	▲ 272,172	
II 投資活動収支の部				
1. 投資活動収入	0	482,879	▲ 482,879	
2. 投資活動支出	0	0	0	
投資活動収支差額	0	482,879	▲ 482,879	
III 財務活動収支の部				
1. 財務活動収入	0	0	0	
2. 財務活動支出	0	0	0	
財務活動収支差額	0	0	0	
IV 予備費支出				
当期収支差額	-170,000	585,051	▲ 755,051	
前期繰越収支差額	28,575	28,575	0	
次期繰越収支差額	-141,425	613,626	▲ 755,051	

貸借対照表（平成23年3月31日現在）

(円)

科 目	当年度	前年度	増減
I 資産の部			
1. 流動資産			
手許現金	1,325	0	1,325
普通預金	233,286	0	233,286
通常貯金	21,701	28,575	▲ 6,874
振替口座	357,314	0	357,314
流動資産合計	613,626	28,575	585,051
2. 固定資産			
支部大会基金引当預金	0	0	0
定期預金	2,500,000	2,982,879	▲ 482,879
定額貯金	0	0	0
固定資産合計	2,500,000	2,982,879	▲ 482,879
資産合計	3,113,626	3,011,454	102,172
II 負債の部			
1. 流動負債			
未払い金	0	0	0
負債合計	0	0	0
III 正味財産の部			
正味財産			
1. 指定正味財産	0	0	0
2. 一般正味財産	3,113,626	3,011,454	102,172
負債及び正味財産合計	3,113,626	3,011,454	102,172

監 査 報 告 書

社団法人 日本家政学会
会 長 大竹 美登利 殿

私ども監事は、平成22年4月1日から平成23年3月31日までの平成22年度の部会の重要な会議に出席するほか、事業報告を聞き、重要な書類を閲覧し、主要な調査を行い、かつ財務諸表及び収支計算書につき監査を実施した結果、次のとおり報告します。

1. 事業報告は規程に従い、部会の状況を正しく示しているものと認めます。
2. 財務諸表すなわち貸借対照表、正味財産増減計算書及び財産目録は平成22年度期末現在の財政状態を正しく示していると認めます。
3. 収支計算書は平成22年度の収支の状況を適正に表示していると認めます。
4. 理事の職務遂行に関する不正の行為または定款に違反する重大な事実は認められません。

以上

平成23年4月16日

社団法人 日本家政学会
(被服構成学) 部会

監事 大村 知子 (印)

監事 猪又 美栄子 (印)

平成23年度 収支予算 (平成23年4月1日～平成24年3月31日)

(円)

科 目	23年度予算	22年度予算	増減(21-22年度)
I 事業活動収支の部			
1. 事業活動収入			
基本財産運用益	0	0	0
特定資産運用益	0	0	0
入会金収入	0	0	0
会費収入	302,500	325,000	▲ 22,500
会誌購読料等収入	0	0	0
大会等収入	450,000	594,000	▲ 144,000
広告料収入	0	0	0
学会刊行物売上収入	0	0	0
著者負担金収入	0	0	0
補助金収入	0	0	0
一般寄付金収入	0	0	0
特別寄付金収入	0	0	0
雑収入	3,000	0	3,000
他会計からの繰入金収入	0	0	0
事業活動収入計	755,500	919,000	▲ 163,500
2. 事業活動支出			
① 事業費支出			
大会・研究発表会等開催経費	3,000	0	3,000
講演会・シンポジウム等開催経費	905,000	814,000	91,000
学会誌等刊行費	580,000	110,000	470,000
研究発表要旨集代	0	0	0
研究補助費	0	0	0
表彰費	10,000	10,000	0
関連学会協力費	10,000	10,000	0
広報費	35,000	35,000	0
給料手当	0	0	0
臨時雇賃金	0	0	0
旅費交通費	0	30,000	▲ 30,000
通信運搬費	0	40,000	▲ 40,000
消耗品費	0	10,000	▲ 10,000
印刷費	0	0	0
雑費	10,000	10,000	0
② 管理費支出			
給料手当	0	0	0
臨時雇賃金	0	0	0
退職給付	0	0	0
福利厚生費	0	0	0
総会費	0	0	0
会議費	130,000	20,000	110,000
旅費交通費	50,000	0	50,000
通信運搬費	40,000	0	40,000
備品費	0	0	0
消耗品費	5,000	0	5,000
修繕費	0	0	0
印刷費	5,000	0	5,000
光熱水料費	0	0	0
事務委託費	0	0	0
事務所管理費	0	0	0
諸謝金	0	0	0
租税公課	0	0	0
支払負担金	5,000	0	5,000
雑費	10,000	0	10,000
減価償却費	0	0	0
他会計への繰入金支出	0	0	0
事業活動支出計	1,798,000	1,089,000	709,000
事業活動収支差額	-1,042,500	-170,000	▲ 872,500
II 投資活動収支の部			
1. 投資活動収入	1,052,500	0	1,052,500
2. 投資活動支出	0	0	0
投資活動収支差額	1,052,500	0	1,052,500
III 財務活動収支の部			
1. 財務活動収入	0	0	0
2. 財務活動支出	0	0	0
財務活動収支差額	0	0	0
IV 予備費支出			
当期収支差額	0	-170,000	170,000
前期繰越収支差額	0	28,575	▲ 28,575
次期繰越収支差額	0	-141,425	141,425

お 知 ら せ

1. 会費納入について

平成24年度の被服構成学部の会費2500円は、5月中に下記郵便払込口座にご送金くださるよう、お願い申し上げます。また、過年度未納の方には別紙にてお知らせいたしましたので、併せてご送金ください。

郵便払い込み口座 00160-2-322300 日本家政学会被服構成学部の会
--

なお、会費に関するお問い合わせは、下記にお願い致します。

〒173-8602 東京都板橋区加賀1-18-1

東京家政大学 服飾美術学科 田中 早苗 宛

TEL・FAX 03-3961-9002

E-mail stanaka@tokyo-kasei.ac.jp

2. 入退会、住所変更等について

お届け、お問合せは下記までお願いいたします。

〒102-8357 東京都千代田区三番町1-2番地

大妻女子大学 短期大学部 家政科 土肥 麻佐子 宛

TEL・FAX 03-5275-6036

E-mail m-dohi@otsuma.ac.jp

※ 入会申込書および変更届、退会届の書式は最終ページをご参照下さい。

※ なお、退会届につきましては(社)日本家政学会の退会手続きとは別処理になっていますので、部会への手続きも併せてさせていただきますようお願いいたします。

3. E-mail アドレスについて

E-mail アドレスの登録にご協力いただきありがとうございます。アドレスをお持ちの方でまだ登録いただいていない方は、平成23年度会費納入の際に振り込み用紙の通信欄にご記入いただければ幸いです。またアドレスの変更がある場合には、なるべくすみやかにお知らせくださいますようお願い申し上げます。

4. 平成23年度新入会員

大塚 有里 (東京家政大学)

川口 順子 (高知県立大学)

崔 童殷 (神戸松蔭女子学院大学)

鈴木 由子 (東京家政大学)

松岡 依里子 (神奈川県立麻生総合高等学校)

若月 宣行 (文化学園大学)

平成 24 年度 被服構成学部会公開夏期セミナー（案）

公開夏期セミナー「グローバルな視点から学ぶアパレル教育と企業の動向」

期日：8月31日（金） 9月1日（土）

場所：オンワード総合研究所 研修センター（横浜市都筑区牛久保3-9-3）

プログラム案

	8月31日（金）		9月1日（土）
12:30～	受付開始	9:00～	受付
13:00～13:10	開会の辞	9:30～11:00	講演 2
13:10～14:40	講演 1 「アパレルの商品企画と海外展開 （仮題）」 交渉中		「アパレル教育と企業の連携につい て、日米の比較（仮題）」 ハワイ大学 ミナコ・マッカーシ ー氏
14:40～15:20	オンワード研究所・研修施設見学を 予定		
15:20～15:30	休憩	11:00～11:45	部会員報告 3 「被服教育のこれまでと未来」（仮） 交渉中
15:30～16:15	部会員報告 1 「イギリスセントマーティンにお ける被服教育」 東京家政大学 鈴木由子氏	11:45～13:30	昼食・移動
		13:30～	見学 シルク博物館を予定
16:15～17:00	部会員報告 2 「国際学会におけるファッション コンテスト」 元東京田中短大 小田巻淑子氏		
17:30～19:00	懇親会		

※詳細が決まり次第ご案内いたします。

連絡先 文化学園大学 磯崎明美 E-mail isozaki@bunka.ac.jp

一般社団法人日本家政学会被服構成学部会 規約

- 第1条 (名 称) 本会は、一般社団法人日本家政学会被服構成学部会と称する。
- 第2条 (目 的) 本会は、会員相互の研究に関する連絡及び協力をはかり、被服構成学に関する教育・研究を促進することを目的とする。
- 第3条 (事 業) 本会は、前述の目的を達成するため次の事業を行う。
- 1 総会を開催する。
 - 2 被服構成学に関する研究・討議・講演などを行う。
 - 3 部会誌を発行する。
 - 4 その他の必要な事業を行う。
- 第4条 (会 員) 本会の会員は、次のとおりとする。
- 1 正会員 被服構成学及びこれに関係する分野を研究する一般社団法人日本家政学会会員で、本部会の目的に賛同して入会した個人。
 - 2 名誉会員 元部会長、または、特に部会の発展に寄与した会員で、70歳を越えた場合に、運営委員会の議決をもって推薦された者。
- 第5条 (入 会) 本会に入会を希望する者は、所定の入会申込書を部会長に提出し、運営委員会の承認を得るものとする。
- 第6条 (退 会) 会員が退会しようとするときは、その旨を部会長に届け出るものとする。
この場合、既納の会費は返却しない。
- 第7条 (役 員) 本会に次の役員をおく。
- 部会長 1名
 - 副部会長 2名
 - 運営委員 若干名
 - 監 事 2名
- 第8条 (役員を選任) 役員を選任は、次のとおりとする。
- 1 部会長及び監事は、運営委員会がこれを推薦して、総会で選任し、部会長の選任および解任は、一般社団法人日本家政学会理事会の承認を受けるものとする。
 - 2 副部会長及び運営委員は、部会長がこれを推薦し、会員に報告する。
- 第9条 (役員任期) 1 役員任期は2年とし、再任を妨げない。
2 役員再任については、申し合わせを別に定める。
- 第10条 (役員職務) 役員職務は次のとおりとする。
- 1 部会長は部会を代表して会務を統轄し、事業計画および予算、事業報告および決算を毎事業年度、一般社団法人日本家政学会理事会に報告する。
 - 2 副部会長は部会長を補佐し、必要な場合には部会長の職務を代行する。
 - 3 運営委員会は本会の業務を運営する。
 - 4 監事は本会の会計監査を行う。
- 第11条 (役員解任) 役員が次の各号の一に該当するときは、解任を運営委員会で動議し、総会で決議して、一般社団法人日本家政学会理事会の承認を受けるものとする。

- 1 心身の故障のため職務の執行に堪えないと認められるとき.
- 2 職務上の義務の違反, その他役員たるにふさわしくない行為があると認められたとき.

第12条(会計) 本会の会計は次のとおりとする.

- 1 経費は正会員の会費, その他をもってまかなう.
- 2 会計年度は, 毎年4月1日に始まり, 翌年3月末日に終了する.

以上

附 則

- 1 この会則の改正は, 総会の議決によって行い, 社団法人日本家政学会理事会の承認を受けるものとする.
- 2 施行に関する内規は別に定めることができる.
- 3 この会則の施行は昭和54年10月8日からとする.
- 4 この会則の一部改正の施行は昭和59年8月3日からとする.
- 5 この会則の一部改正の施行は昭和63年8月1日からとする.
- 6 社団法人日本家政学会部会規定に基づき, 平成15年8月27日から被服構成学部会会則を廃止し, 社団法人日本家政学会被服構成学部会規約とする.
- 7 この規約の施行は平成15年8月27日からとする.
- 8 社団法人日本家政学会部会規定に基づき, 平成18年8月22日から被服構成学部会規約を廃止し, 社団法人日本家政学会被服構成学部会会則とする.
- 9 この会則の施行は平成18年8月22日からとする.
- 10 社団法人日本家政学会部会運営規程および部会運営規程細則に基づき, 平成22年5月29日から被服構成学部会会則を廃止し, 社団法人日本家政学会被服構成学部会規約とする.
- 11 この会則の一部改正の施行は平成22年5月29日からとする.

一般社団法人日本家政学会被服構成学部会 申し合わせ

- 1 運営委員会 運営委員会は、部会長、副部会長、運営委員、監事で構成する。
- 2 役員の任期 (1) 規約第9条に従って部会長の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、継続して3期はつとめられない。
(2) 運営委員の任期はできるだけ2期4年間とし、その交代は半数ずつ交互に行うことが望ましい。期間をあけての再任は、これを妨げない。
- 3 運営委員の選任 運営委員の選任にあたっては、できるだけ部会員が在住する広範な地区から選ぶように配慮する。
- 4 事務局幹事及び編集幹事 (1) 必要に応じて事務局幹事及び編集幹事をおくことができる。
(2) 事務局幹事及び編集幹事は若干名とし、部会長がこれを指名する。
(3) 事務局幹事及び編集幹事は役員会に陪席することができるが、議決権は持たない。
- 5 事務局 事務局は、原則として部会長のもとにおく。

附則

この申し合わせは、一般社団法人日本家政学会被服構成学部会規約に基づくもので、改正にあたっては、運営委員会の議を経て、総会で承認する。

- 1 この申し合わせは、平成15年8月27日から施行する。
- 2 この会則の一部改正の施行は、平成18年3月31日からとする。

平成 22・23 年度役員

部会長	布施谷節子	和洋女子大学
副部会長	岡部 和代	京都女子大学 短期大学部
	鳴海多恵子	東京学芸大学
運営委員		
(庶務)	土肥麻佐子	大妻女子大学 短期大学部
	原田 妙子	名古屋女子大学 短期大学部
	田中 早苗	東京家政大学 短期大学部
(会計)	磯崎 明美	文化学園大学
	渡部 旬子	文化学園大学
	十一 玲子	神戸女子大学
(企画)	増田 智恵	三重大学
	小田巻淑子	元 東京田中短期大学
	森下あおい	滋賀県立大学
(広報)	大塚美智子	日本女子大学
	植竹 桃子	東京家政学院大学
(編集)	渡邊 敬子	京都女子大学 短期大学部
	吉村眞由美	金城学院大学
(監事)	大村 知子	元 静岡大学
	猪又美栄子	昭和女子大学

事務局 〒272-8533 千葉県市川市国府台 2-3-1
和洋女子大学 被服構成学研究室
TEL 047-371-2196 (ダイヤルイン)
FAX 047-371-1336 (代表)
E-mail : fuseya@wayo.ac.jp

平成 24・25 年度役員

部会長	鳴海多恵子	東京学芸大学
副部会長	大塚美智子	日本女子大学
	森 由紀	甲南女子大学
運営委員		
(庶務)	土肥麻佐子	大妻女子大学 短期大学部
	原田 妙子	名古屋女子大学 短期大学部
	石垣 理子	昭和女子大学
(会計)	服部由美子	福井大学
	田中 早苗	東京家政大学 短期大学部
	中村 邦子	大妻女子大学 短期大学部
(企画)	増田 智恵	三重大学
	川端 博子	埼玉大学
	小山 京子	美作大学
(広報)	雙田 珠己	熊本大学
	薩本 弥生	横浜国立大学
(編集)	渡邊 敬子	京都女子大学
	鈴木 明子	広島大学
(監事)	大村 知子	元 静岡大学
	布施谷節子	和洋女子大学

事務局 〒184-8501 東京都小金井市貫井北町 4-1-1
東京学芸大学 生活科学講座
TEL 042-329-7439 (ダイヤルイン)
FAX 042-329-7439
E-mail narumi@u-gakugei.ac.jp

(社)日本家政学会 被服構成学部会入会申込書および変更届, 退会届

入会 変更 退会 (いずれかを○で囲む)	申込年月日 年 月 日		受付年月日 年 月 日	
	ローマ字			
	氏名	氏	名	
	西暦	19 年生	性別	男・女 (どちらかを○で囲む)
家政学会所属支部				
自宅住所	〒(-)			
	TEL		FAX	
	E-mail			
勤務先・職名 および所在地	勤務先		職名	
	〒(-)			
	TEL		FAX	
	E-mail			
専門分野	<研究分野> <担当授業科目>			
最終学歴				
学位				
部会誌送付先	自宅・勤務先 (どちらかを○で囲む)			

太線枠内は必ず記入してください。細線枠内は差支えない範囲でお書きください。

退会の場合は、今後、連絡する必要がある場合に備えて、連絡がつく自宅か勤務先の情報をご記入ください。

お届けは「お知らせ」ページの宛先まで、添付メールまたは郵送にてご提出下さい。

部会費は「お知らせ」ページの口座にご送金ください。

* 個人情報保護には十分に注意をいたします。

なお、書式を被服構成学部会ホームページからダウンロードしてお使いいただくこともできます。

URL: <http://h-kohsei.com>

編集後記

先生方がお忙しい合間を縫ってご協力いただきましたおかげで、無事に33号をお届けすることができました。ご執筆やご協力に深く感謝し御礼申し上げます。これまで被服構成学を担ってこられた先生方の偉業を次の世代に繋ぐにはどうしたら良いか。渡邊先生と知恵を絞りながら取り組ませていただきました。部会員の皆様の情報源として活用して頂ければ幸いです。（吉村（片瀬））

原稿執筆などご協力をいただいた皆様に感謝申し上げます。今回は大村先生に教育の観点から執筆をいただきました。貴重な問題提起をしていただきありがとうございました。また、科研費の受け入れ状況の一覧を作ったことで、盛んに研究が行われていることが分かりました。部会員同士の共同研究や科研費応募などのきっかけとなり、被服構成学の分野がますます発展することを期待します。（渡邊）

平成24年3月31日・発行

発行：(社) 日本家政学会 被服構成学部会

印刷：(株) デルプリント

TEL：06-6534-0210

